

龍谷大学史報

vol. 20



目 次

お辞儀の仕方から教えます ～博物館学芸員課程に携わった日々～	北村 高	2
図書館と私 一むかし・いまー	新田光子	7
『学林諸記』三 天保九年（一八三八）閏四月～六月	I～VII	
表紙解説・資料室だより		19

お辞儀の仕方から教えます

～博物館学芸員課程に携わった日々～



きたむら たかし

龍谷大学名誉教授 北村 高

2019 年は、龍谷大学文学部に「博物館学芸員課程」が設置されて 50 周年、博物館実習生による「十二月展」の開催が 40 回を迎える年となる。龍谷大学 380 年の歴史や龍谷大学文学部の伝統に比べれば、ごくわずかであるが、一つの諸資格講座が 50 年も存続したことは、この講座に関係した者の一人として感慨深いものがある。

私は、1990 年に龍谷大学文学部史学科（現歴史学科）東洋史学専攻担当の専任教員として奉職し、2017 年 3 月に規定により退職するまで、26 年間龍谷大学にお世話になった。私が 1967 年に 18 歳で龍谷大学文学部に入学した時から数えれば、約 50 年間にわたり何らかの形で龍谷大学と関わったことになる。私の大学生時代は、学園紛争で授業もなく京都の青春を謳歌した時期であった。私の一時的錯乱により大学院への進学時には、それまでの自分の不勉強もあり、東洋史学の諸先生や大学院の先輩から歴史学、特に東洋史学のイロハをしっかりと叩き込まれた。この時期の私にとって、先生や先輩方を「無理偏に拳骨」と書くと思うぐらいに厳しい指導をされた。

私は、この大学院時代になぜか「博物館学芸員課程」を受講し、博物館学芸員資格を取得した。それには、先生や先輩の勧めもあり、東洋史学の勉強にのみ没頭するのではなく、他の専攻の人々や文化財などに興味を持ち、心を豊かにしなさいとのアドバイスもあったからである。また、私の家に江戸時代からの書物や訳の分からない品物があり、その来歴などを知りたく思ったことも一因である。どうにか博物館学芸員資格を取得した私は、龍谷大学に奉職する時の履歴書に、自動車免許すらないため、中高社会科の教員免許と共に「博物館学芸員資格取得」を記してしまった。当初このことが、私の文学部教員としての仕事に大きく作用するとは思ってもいなかった。

日本における博物館学芸員の規定は、1949 年の法隆寺金堂壁画焼損という不幸な事件を契機に始まる。1950 年に「文化財保護法」が制定され、翌 1951 年に「博物館法」が成立し、こ

の法律の中で各博物館や美術館では専任の博物館学芸員を置くことが義務付けられた。さらに、1955年制定の「博物館法施行細則」により、博物館学芸員となるための資格要件が明記された。これらの法律などによって規定された博物館学芸員の仕事は、各美術館や博物館などの資料の「収集」「整理、保管、修理」「公開、展示」「研究、分析」「教育普及活動」など多岐にわたるものであった。小規模の博物館などでは、これらの仕事を数名以下の博物館学芸員でしなければならない、決して魅力的な業務とは言えない仕事である。

龍谷大学文学部「博物館学芸員課程」は、遅ればせながら1969年に諸課程科目として新設された。龍谷大学文学部に学ぶ学生の中には、仏教関係の寺院の子弟もおり、故郷に戻れば寺院の継承と共に教員もしくは生涯教育などでその地域の文化行政などに関わる人が存在した。また、「博物館学芸員課程」を文学部全体に開放したことにより、発足当初より定員以上の受講生を集め、選抜試験を実施する結果をもたらした。これには発足当初より、担当の先生方が他大学に負けないような、もしくはそれ以上に魅力的なカリキュラムを構築され受講生たちに提供されるとともに、博物館学芸員としての心構えや礼儀作法など基礎の基礎を懇切丁寧に厳しく指導された結果であり、この理念は現在でも「博物館学芸員課程」担当教員の間に継承されている。

龍谷大学文学部「博物館学芸員課程」の礎を築かれた先生で重要な人に、網干善教先生と小野勝年先生のお二人がおられた。網干先生は、当時すでに関西大学の教員として活躍され、高松塚古墳の発掘で一般に人々にも広く名を知られた先生であり、関西における博物館学の重鎮でもあった。

一方、小野先生は、「博物館学芸員課程」が発足する2年前に龍谷大学文学部へ赴任された先生である。小野先生の前職は、奈良国立博物館の学芸課長で、戦前には外務省在支特別研究員として中国に派遣され、中国各地の遺跡調査をされ、終戦により中国から帰国された。小野先生は、奈良国立博物館の要職を歴任されるとともに、東洋史関係の講義を関西の諸大学で担当され、『居庸関』の共同研究で学士院賞を受賞された東洋史学と博物館学の両方に通じた碩学であった。

小野先生は、私にとっては非常に厳しく学部、大学院と東洋史学を指導していただいた恩師でもある。小野先生に、「博物館学芸員課程」を取ってみたいかと言われ、何も知らずに博物館実習まで突き進んだのである。今にして思えば、多忙な先生の代わりに、学部の実習生をまとめ、学外実習の際には実習先などに失礼がないように配慮する役目を与え、社会的常識などが不足している私に、少しでも社会人として自立させてやろうとする先生の思いやりであったのかも知れない。

何はともあれ、小野先生の亡くなられた翌年に龍谷大学に奉職した私は、東洋史学の講座を担当することになる。しばらくして履歴書に苦し紛れに書いた「博物館学芸員資格取得」が私に災いをもたらすことになる。「博物館学芸員課程」の講義は、発足当初より小野先生の関係もあり、龍谷大学文学部では史学科(現歴史学科)教員が分担して担当することになっていた。他大学の「博物館学芸員課程」担当者は、日本歴史や美術史、考古学専攻の教員が中心であるのに対し、私のような東洋史学それも北アジアや中央ユーラシア史を中心に研究する者が場違いな所に混じり込むことになった。当初は、全国大学博物館学協議会など龍谷大学と他大学との折衝事があれば、日本考古学担当の岡崎晋明先生が文学部に在職中は総てお任せしていた。私は、「博物館学芸員課程」の授業の一部を分担していればよく、専門外ではあるが自分の興味ある勉強の一つぐらいにしか考えていなかった。しかし、岡崎先生退

職後は、その仕事のすべてが私に回ってくることとなった。さあ大変だ。素人同然の「博物館学芸員課程」担当教員としては、もう一度「博物館学芸員課程」のカリキュラムを学ぶことから始動しなければならない事態となった。

龍谷大学文学部における「博物館学芸員課程」のカリキュラムは、発足当初から殆ど変更をしなくても良いほどの素晴らしい講義内容を持っていた。さらに、龍谷大学文学部の博物館実習の特色として、他大学では夏季休暇中などに学外の博物館や美術館で必修化されていた館園実習をする必要があったが、龍谷大学文学部ではこれが免除されていた。その理由は、龍谷大学文学部の博物館実習生が、実習生による「十二月展」を独自に開催することで、他館での館園実習の代替とされていたのである。文学部における博物館実習生の「十二月展」開催の契機は、実習生が学外の博物館や美術館を見学したことにより、自分たちの手でミニチュアでもよいので企画展示をしてみたいとの欲求が芽生えたところにある。当時の博物館実習指導教員は、実習生たちの思いをかなえてやりたいとして実現の方向に動かされた。この展示会開催予算も計上されていないところから出発した「十二月展」の歴史を知れば、私の「博物館学芸員課程」担当期間中に「十二月展」を中断もしくは終了させてはならないとの命題を与えられたと同義のこととなっていた。

現在の大学における「博物館学芸員課程」のカリキュラムは、法令などの改正により1969年発足の当初とは少し異なっている。これは、1997年に文部省が、博物館や美術館における展示物のコンテンツや展示方法などの多様化により、従来のカリキュラムでは現実の博物館や美術館などの展示や研究に対応できないとし、5科目10単位から8科目12単位に、2012年より9科目19単位に引き上げたことが原因である。また、インターンシップ的な館園実習も博物館学芸員資格取得のための必修要件となり、文学部博物館実習生にとって卒業年次に非常に過酷な時間を過ごさせることとなった。また、他の博物館や美術館などに行つての館園実習必修化は、「十二月展」存続の危機でもあった。しかし、文学部の博物館実習生たちは、入学当初から文化財を身近に感じる環境にあり、先輩たちが頑張つて作つてきた「十二月展」を見て、自分たちは先輩の「十二月展」以上のものを開催しようとする意気込みを持って実習を選択していた。また、先輩たちが努力して継続してきた「十二月展」は、龍谷大学関係者のみならず、学外の人々にも龍谷大学文学部の12月の行事の一つとして認知されており、一定のリピーターを確保していた。さらに、大宮学舎には特別な事情が存在する。それは、文化財保護法など規定で龍谷大学が所蔵する文化財の一般公開義務が課せられており、大宮学舎本館の一般公開を「十二月展」の期間を利用して実施することにより法令をまもることにもなっていた。龍谷大学文学部博物館実習の「十二月展」は、大学当局の理解もありこのような経過を経て現在まで継続してきたのである。

では、龍谷大学文学部博物館実習の「十二月展」開催までの一年間の流れについて記してみたい。まず、4回生になる前の3月末に行われる面接試験などを経て新たな博物館実習生が誕生する。新実習生は、ガイダンスにおいて年間講義計画や講師陣の紹介を受けた後、受講生の自己紹介、班別編成、幹事などの世話役の選出などを行う。この時を利用して「十二月展」までのおおよそのスケジュールも学生に通知する。また、夏季休暇中における他館での館園実習の手続きなども説明する。さらに、夏季休暇に入る前に各班で相談した当該年度の「十二月展」に関するテーマを、各班代表によるプレゼンテーションの準備もさせる。当該年度の「十二月展」テーマ決定には、各班内の意見対立や、班同士の意地の張り合いなどもあるが各班における結束の強化にも繋がっている。

夏季休暇前に「十二月展」のテーマを決定し、テーマに沿った展示品などの所在調査をする。龍谷大学もしくは実習生の関係者にテーマに則した物の所有者がいればよいが、龍谷大学外の所蔵先では調査を依頼のハードルが一気に高くなる。先ず調査先へ返信用のハガキなどを同封し、当該年度の「十二月展」開催の趣旨やテーマなどを記した書類と、調査先における調査品目を明記した依頼書を郵送して先方の調査許可を頂くことからスタートする。この調査時に、龍谷大学生として正しいマナーが実習生に求められる。特に、服装や言葉遣い、礼儀作法などである。この調査時に調査先に不快な印象を与えると、以後の借用交渉などが困難となる。実習担当教員としては、この段階までに実習生に厳しく礼儀作法など教え込まなければならない。

さらに、調査対象物の取り扱う方法が、陶磁器や金工品、漆器、書籍、軸物などで異なることを教えておく必要がある。資料を扱う基本事項の一つに、手袋の使用がある。紙を使用したものや陶磁器などでは、基本的に手をよく洗い手袋を使用しない。ただし、紙の場合は調査者の息などが直接かからないように注意しなければならない。書物などを扱うときには、人間の手のひらに如何に多くの油が付着しているか知る必要がある。手をよく洗い、出来得る限り皮脂を除去することは、調査品を扱うための第一歩である。陶磁器は、手が滑って落として壊さないためにも手袋を使用しない。例え手が滑っても資料に被害がないように低い位置で、できれば下に柔らかいクッションなどを敷いて調査をする配慮が求められる。陶磁器や金工品では指紋がついても丁寧に拭けば除去することも可能である。漆器などは、手袋を使用して指紋などが付着しないようしなければならない。また資料を扱う際、時計やアクセサリなど資料を傷つける恐れのあるものを外させることにも注意しなければならない。

私の博物館実習担当時は、実習担当の各先生方が実習生になるべく本物を見せ、触れさせ、体感させることに心配りされていた。先生方の中には、中国漢代の王宮などで使用された瓦の実物を持ってこられた先生もおられた。このような貴重な実物を取り扱うことは、実習生にとって幸せではあるが、破損すればかけがえのない文化財を失うことになる。実習生に対し細心の注意を持って資料に向き合い、本物が持つ迫力を知り、いかなる時でも平常心を持って史料を取り扱う、博物館学芸員としての基本的な心構えを教える場にもなっていた。

夏季休暇が終了すると実習生にとって横浜・東京巡見となる。この巡見期間を利用して各班から出された「十二月展」のタイトルを決定する。このタイトルは、若い実習生らしく、展示の内容が周知され、一度行ってみようかと思わずものにしなければならない。一般の博物館や美術館で開催されている展覧会のタイトルは、多くの実習生にとってつまらないものに映る。自分たちが博物館学芸員となって、このようなタイトルで展示会を開催したいかと尋ねると、殆どの実習生が否と答える。若者らしく、素敵なセンスでスマートなタイトルを考え、学芸員として普段から言葉の持つ力を体感していなければならない。タイトル選定は、学芸員にとって至難の業ともなっている。

タイトルが決まれば、次に展示品の選定に移る。テーマ決定時に調査した資料の中から展示品を選定し、所蔵先に展示依頼や借用願いを郵送し許可を求める作業になる。この時に、所蔵先での調査時に先方の機嫌を損ねるようなことをすれば、100%の確率で調査や借用を断られる。京都の人の中には、伝統的に相手を見て判断の可否を下す人がいる。例え学生であっても、無作法な行いがあれば決して許されない。一度壊れた関係を修復するには非常な困難を覚悟しなければならない。実習担当教員として、相手先にお詫びに行き関係修復を

図り、実習生に対しは何が相手先を怒らせたのか教える必要がある。調査先へは、自腹で菓子折りなどを持ってお詫びに行くことも、教員に課せられた責務である。

展示品が決定し、所蔵先などからの展示、出陳許可が得られれば、展示品の解説などを書く作業に移る。わかりやすい短い文章で、的確に展示品を紹介することは、文章を書くのに不慣れな実習生にとって苦行となる。実習生の解説文ができると、担当教員が赤ペン先生となり実習生の解説文の添削と文体の統一をする。この作業を怠ると、解説文中に不穏当な表現や誤った説明などが混入し、図録全体の品格を損なうことになるので注意しなければならない。

図録の作成準備と共に、展示会場の下見や展示品の配置、観覧順路の確認などの作業が次に来る。最初に模型などを作って仮展示を行い、本番への備えとする。実習生は、10月後半から11月中旬にかけて同じゼミの友人が卒業論文の下書きをしている時に、卒業論文を放擲して「十二月展」の開催に向けて猪突猛進し、ゼミの先生に怒られ呆れられながら超多忙な時間を送るのである。

展示品も決まり、図録の印刷も発注し、展示品の借用、搬入などが完了すると、いよいよ「十二月展」の開催である。担当教員としては、「十二月展」が本当に開催できるのか、開催すれば事故なく終了するのか、最終的に展示品を無事に借用先に返却できるのか、始まれば早く終われと願う日々を過ごすこととなる。博物館実習生にとっては、この「十二月展」の成果が、4年次における卒業論文以上に大切なことに思えるのかもしれない。

このように、「博物館実習」では、まず挨拶や言葉遣い礼儀作法などから教える。最初に教えることは、相手に失礼にならないようなお辞儀の仕方である。現在では、理工学部、国際学部にも「博物館学芸員課程」が設置されているが、先頭としての龍谷大学文学部の「博物館学芸員課程」は、種々の困難を乗り越え50年間続いてきたのである。

文末ではあるが、展覧会開催の予算もないところから出発した「十二月展」に対し、多大なるご援助を賜った龍谷大学当局並びに、「博物館学芸員課程」を担当して下さった文学部教務課の皆様に改めて深甚なる謝意を表すとともに、この思い出の詰まった拙い文を終えたい。

図書館と私—むかし・いま—



にっ た みつ こ
龍谷大学名誉教授 新田 光子

はじめに

「図書館と私—むかし・いま—」と題し、図書館や本、そしてそれらをとおした、これまでの私と人との出会いの数々を少し綴ってみたい。

私は龍谷大学を2019年3月に定年退職した。退職直前の2年間は龍谷大学図書館長であったので、その期間は図書館利用者であるとともに図書館運営を担ってきた。図書館運営について考えてみると、本学図書館をはじめ多くの図書館を以前よりもっと身近に感じることができ、子ども時代・学生時代に自分はどのように図書館や本と関わってきたか、むかしから、いままでに至る私の出会いの数々をさまざま思い起こすことができた。

本学図書館はじめ図書館のむかし・いま、そしてこれからの思いを馳せてみたい。

1. 児童図書館、学校図書館

私は広島市生まれの広島市育ちである。最初に出会った図書館は、原爆爆心地に作られた「広島児童図書館」であった。原爆が投下されて街の復興が緒について間もない物資不足の時代に、「原爆ドーム」近くに図書館が作られた。その図書館に所蔵された本は、日本各地や世界各国からの贈呈本であったと思う。棚が隙間だらけであったが、建物外観はモダンな円形の造りであったことを覚えている。それとともに思い出すのは、隣に小さな遊園地があったことである。図書館帰りには母や友だちと連れだって必ず立ち寄るため、図書館に行くのが楽しみなのか、遊園地のサル山に立ち寄るのが楽しみなのか、どちらとも言い難い子ども時代であった。

児童図書館での本と人との出会いがあったためか、私は小学校や中学校の図書室をよく利用した。小学校の図書室ではシリーズものの偉人伝や探偵推理小説が新しく届くと、図書室の先生にすぐ教えてもらった。真っ先に新しい本を読ませてもらったことは、大変貴重な有

り難い本との出会いであり、いまでも忘れ難い著者や本の登場人物との出会いであった。

小学校も中学校も、そして高等学校も広島市内中心部にあり、学校も図書室も原爆で焼失したので原爆後に造られた。古くからの蔵書が少なかった分、本棚はかなり隙間があったように記憶している。そのせいかどうか、私の場合は本棚の上の端から順に本を見ていく習慣ができてしまい、その習慣は棚から本を探すいまも続いているように感じる。

中学校からは本を読むと、「読書ノート」で感想文を綴った。そのノートは高校時代も続き、いまでも大切に保存している。ただ、学校の図書室は小説や「おもしろい本」をたくさん所蔵していたが、受験勉強のためか本は小学校のときほどには借りず、大抵自宅にあった本を読み漁った。中島敦の『李陵』『山月記』、井上靖の『蒼き狼』『敦煌』『風濤』、吉川栄治の『親鸞』『新平家物語』『三国志』などである。なかでも『三国志』を手掛かりにして『水滸伝』『戦国策』『十八史略』など中国歴史書が愛読書となった。家の本棚からよく手にしたのは、きょうだい兄ふたりだったためか偉人・豪傑の武勇伝であり、男性主人公が波乱万丈の人生を辿るものであった。

2. 大学図書館

学校図書館と大学図書館は図書館の種別が異なっていて、大学図書館はやはり学術書、専門書が中心となる。私の大学学部時代の図書館利用は、多くの学部生と同じく授業準備やレポート作成、あるいは自習のための貴重な場所であった。卒業論文を書くための文献探しにはもちろん利用して、多くの貴重な勉学経験をえた。棚を見て、こんな本もあるのだという、探しものとは関係のない、すぐには必要のない本を手にする経験は、案外楽しかった。大学・大学院在籍中は、いつも大学図書館で多くの時間を費やした。



こうした学生としての図書館利用経験が、のちに龍谷大学教員となって教養教育を考える際に参考になった。学生指導をする上で必要な授業テキストとして『大学生入門』（高橋三郎・新田光子著、世界思想社、2001年初版、2009年3訂版）を出版したが、「読書」の項目を入れて、「本のおもしろさ」「本の効用」を伝えようとしたことにつながっている。「おもしろい本」は、新しい世界の扉を開けてくれることが往々にしてある。大学生のみなさんが授業の参考書に加えて、大学時代に「おもしろい本」に出会ってくれることを、強く願ったからである。

私の学生生活は図書館抜きには考えられなかったが、とくに研究テーマをもって論文を作成しなければならない大学院生、さらには教員生活では図書館の利用頻度が格段に増し、利用する図書館の種類も数もかなり増した。

必要な文献調査は所属大学の図書館だけでなく近在の、あるいは他府県の図書館を利用することが多くなった。大学図書館間の相互利用が可能である制度が確立していたので、その制度を利用して国公立どの大学の図書館も利用できたが、いまのようにデジタル化が進んでいなかったため、直接図書館を訪問した。図書館に長時間籠って本を探し、メモを取り、コピーした。必要な箇所をコピーするだけで時間がかかって大変だったが、その間にも他の関

係ない資料に目を通して時間を忘れるなどは、とても貴重で有意義な時間であった。ただ、苦労してこれは絶対に必要だと思ってコピーしたのも、ちゃんと読みこなせたかどうかは別問題であり、手元にはコピーの山が築かれた。大部なコピーはファイルに綴じたり製本したりしたので、それが部屋を陣取ってあふれる状態は、いまもむかしも変わらない。

3. 国立・公立図書館、専門図書館

研究テーマによっては大学図書館だけでは課題に取り組むことが困難であり、大学院生時代から国立国会図書館、公立図書館あるいは専門図書館を利用することが多かった。それぞれの図書館は特徴ある蔵書構成で、他館にない「コレクション」を誇っていたので利便性に優れているが、首都圏に立地している図書館が多く、関西圏から出かけていく私には、時間的・費用的に、かなり大変だった。

国立国会図書館は、出版にあたって納本が義務づけられ、あらゆるジャンルの本がおさめられているため、上京の機会があるとしばしば利用した。

都道府県、市町村の公立図書館も、立地を生かして特徴に応じた郷土資料をはじめ図書館独自のコレクションを充実させており、それぞれ魅力ある図書館であった。私にとっては、主に宗教や戦争関係で、福島県立図書館佐藤文庫、奈良県立図書館情報館、広島県立図書館、広島市立中央図書館などである。

例えば、国立公文書館が設立されると何度か通ったが、当初は欲しい資料にあまり巡り合わなかった。2001年、国立公文書館に「アジア歴史資料センター」が設立されると、戦争関係の資料も増え、なによりも上京する必要もないので、かなり利用するようになった。時代の変化を感じた。

専門図書館というジャンルの図書館は、所蔵文献資料からして各館とも文字通り“コレクション”を“売り”にしているので、“調べる”には大きな魅力であった。

宗教関係では佼成図書館（東京都）、三康図書館（東京都）、教育関係では教育会館図書室（東京都）、戦争関係では昭和館（東京都）、偕行文庫（東京都）、雑誌関係では大宅文庫（東京都）などが、私の“調べる”拠点となった。

専門図書館は、最初から専門ジャンルにもとづいた蔵書構成をおこなっているため、特化した本・資料は歴史的広がりをもった知の宝庫であるが、最近は運営し維持していくうえで経済的苦境に陥っている専門図書館がみうけられる。

4. 海外の図書館

龍谷大学在職中の1997年度に、英国LSE大学に留学する機会をえた。その間の1998年2月にサセックス大学マス・オブザベーション・アーカイブを訪問して、コレクションを閲覧した。

マス・オブザベーションは1930年代から開始された、イギリス庶民による日常生活を記録する活動である。私はそのうち、第二次世界大戦中の空襲にみまわれた人びとの生活記録にとくに関心があって、何度かアーカイブに足を運んだ。アーカイブ資料はその後、有料の電子版も利用できるようになったが、実際に図書館で英国研究者だけでなく海外の研究者に交じってアーカイブ資料を手にする経験は、とても貴重だった。

私は海外に出かけた折には、できるだけ公立図書館や大学図書館を訪問してきた。英国の大英図書館（私の在英研究期間中に伝統的な建物が閉鎖され壊され、後に移転先で新しくモ

ダンな建物に生まれ変わった)・大英博物館の日本・東洋コレクション、中国の大連図書館大谷光瑞関係資料、あるいはポルトガルのコインブラ大学図書館天正遣欧少年使節関係図書など図書館を訪問しコレクションを閲覧すると、まさに時空を超えて、むかしの人々の息吹を感じることができると同時に、当時の人々の労苦が偲ばれた。

2019年に日本で封切られた「ニューヨーク公共図書館」(原題:Ex Libris-The New York Public Library 2017年、アメリカ)は、地図コレクションの内容も素晴らしかったが、(ボランティアを含む)スタッフが活動して図書館空間や所蔵図書資料を活用して繰り広げる多彩なプログラム・イベントは、楽しさが身近に伝わってくる秀逸の映画作品であった。

5. 龍谷大学図書館「戦争・平和文献コレクション」

龍谷大学図書館は、「写字台文庫」「長尾文庫」などの優れたコレクションを所蔵しているが、「戦争・平和文献コレクション」は、比較的新しく加わった本学コレクションである。社会学者の高橋三郎氏(京都大学名誉教授)が長年にわたり収集された戦争・平和関係の蔵書(整理済み文献は2019年末現在、約7500点)コレクションが、学内外からの利用で閲覧可能となった。

2011(平成23)年、本学創立370周年記念事業として『龍谷大学戦没者名簿』を刊行したが、私は編集・出版作業の基本文献として多くを利用させていただいた。この名簿刊行後に本学に寄贈された文献は、和書・洋書を問わず、軍事史、日本軍隊、ミリタリーカルチャー、戦争・軍隊社会学、ホロコースト・ジェノサイド、戦争犯罪・戦争裁判、戦争と女性・子どもなど、いくつかのテーマ群にまとまっている。戦争・平和研究に利用する価値ある、日本有数の図書館コレクションである。コレクション冊数は、これからも増えて最終的には1万冊を超える。質・量ともに国内外に誇ることができるものである。

かつてアイリン・バーカー英国ロンドンLSE大学社会学部教授は、これらの本の一部を京都大学高橋研究室で目にした。テーブルの上や床の上、部屋中と狭しと本が積み、本を跨がないと入り口から一歩も部屋の中に進めない研究室を目の前にして、啞然とした驚嘆の声を発せられた。そのあとしばらくは、「今までこんな本のヤマは見たことがない」「信じられない」を連発された。私の研究室の場合、学生が来ると、「ここにある本を全部読んだのですか」とよく聞いていたが、その比ではない本の山であった。高橋蔵書の山を写真に1枚でもいいから収めておけばよかったと、私は大いに悔やんでいる。いまでも目に焼き付いて離れない、うず高く積まれた本の光景であった。

6. これからの図書館

2018年8月30日・31日、本学において「第79回私立大学図書館協会」総会・研究大会が開催された。メインテーマ「図書館とデジタルアーカイブ」を中心に、大学図書館の現状と将来に向けての課題を話し合い、私立大学図書館関係者が図書館情報を共有する目的の全国規模の大会であった。両日は、加盟校図書館スタッフはじめ関係機関・団体、企業関係者など、延べ700人近くが参加した。

私立大学図書館協会は、戦前の1938(昭和13)年に設立され、設立には本学も大きく貢献した。1940(昭和15)年の第3回全国大会は、本学が開催校であって、その4年前の1936(昭和11)年に新しく図書館(現、大宮図書館)を竣工させ、前年の1939年に大学創立三百周年を祝った。大会では多くの人に新しい図書館が披露された。その後図書館はじめ龍谷

大学はアジア・太平洋戦争の惨禍を生き抜いて、80年余の歴史を築いてきた。

私は、いまの時代に図書館はその価値をいさかも減じていないと考えている。これからさらにデジタル化がすすむ時代には、デジタルの強みを生かして図書館コレクションの存在を学生はじめ学内外に、そして広く全国、海外に向けて“売り”にしていかなければならないと思っている。

コレクションは、元々個人や団体が思いを込めて収集されたものが、さまざまな機縁と多くの人を介して図書館コレクションとなったものである。その後図書館で不特定多数の利用者に閲覧されるまでには、さらに図書館関係者をはじめ多くの人の手が加わってコレクションとしての体をなすであろう。最初からそのままの姿を伝えるというよりも、むしろ大切に保存されて、のちに付け加えられたり、時代とともに発展した姿に変わり充実したものとなって、その存在価値を発揮するものも少なくないであろう。コレクションを図書館が守り育てることが、図書館自体の果たすべき社会的役割である。また、コレクションという知の宝庫の発展のためには、大学図書館、国公立図書館あるいは専門図書館同士の連携が、さらに模索されるべきであろう。

龍谷大学の図書館には、国宝や重要文化財に認定された史料をはじめ特色のあるこのようなコレクションが収蔵されている、といったしっかりとした情報発信や幅広く継続した情報共有は、これまで以上に必要であると思われる。

本学図書館は、これからも大きな期待を担っていることを確信している。

町奉行佐内

『史報』十九号本文頭注参照。

真野八郎兵衛

不詳。

揚屋入

僧侶・医師などの未決囚を収容した雑居房に入牢させること。

同廿一日

一町奉行左内西役所江罷出、面会与力真野八郎兵衛。

別紙之通り書付持参二而、揚屋入被仰付候所化十老人之内六人、此間相願候二付、衣類・蒲団御差入二相成候。然所残ル五人右同様差入遣し度候間、可然御取計被下度段申入。

返答

奉行江申聞候所、差入遣し可申間御渡可被成旨申二付、町代を以差出候事。

一蒲団老帖

和州蓮休寺新

单物 老

玉暁

一同

江州正覚寺新

東嶺

一同

越中正覚寺二男

探了

一同

三州浄願寺弟子

龍山

一蒲団老帖

越中真行寺

僧玄

閏月廿八日

伊勢国所化中

一願書

中座惣代

暁了

耆年惣代

龍玉

上座惣代

鷺嶺

左源太

『史報』十二号本文頭注参照。

御聞濟

『史報』三号本文頭注参照。

於国許修学及法義為引立、来ル八月上旬方例年之通講釈法話相企申度、依之從御本山越後正念寺慧麟藹滿江講釈法話被仰付御指向二相成候様御願被下度、此段奉願上候。右願之通御取計被下候ハ、難有奉存候。以上。

戊閏月 学林 知事御役所

右御用掛り左源太より差出ス。

廿九日 右御聞濟、左源太江申達ス。

同月廿九日

一此節公儀召捕二相成有之候所化江学林所化方見舞遣し度旨申出候間、町役所申入、町代を以遣し候旨御用掛左源太申出。

五月朔日 一来亥夏学林承襲

江州願正寺

無導

江戸法照寺

月溪

越前正善寺

功勳

同監事役

伊勢明林寺

覺明

石州正藏房

善寂

豊前圓照寺

随惠

右両役三人之内兩人ツ、奉伺。

右御用懸り洪蔵帳面ヲ以申出。

洪蔵

『史報』十九

号本文頭注

参照。

典膳

間宮典膳。不

詳。

知事

御本山

御役人中

同日

一右御聞濟二付、端書認メ替御用掛り洪蔵江相渡ス。

天保八丁酉年

夏中論議題

十住論

易行品

当戊夏

浄土論

学林方相願候者昨年方相始り学林論議之義、右之通致度旨御用掛り左源太申出。

五月七日

一公儀御差留ニ相成有之候所化江過日学林方食物等差入度旨申

出候ニ付、町代を以申入候処、右ハ御大法も有之候義ニ而、

品物ニ寄不相成候。魚物骨有之候品、或ハ菓子等榮耀物者不

相成、殊ニ掛り役方書附ニ而も相添不申候而者難取計。此度者

先其俣差入遣候得共、以来者書附差出候様との事ニ付、学林

方差入と申候而ハ、名前出候而者困り候間、保証人方与申次第

ニ致し度、左之通書附相添今日町代を以為為持遣候旨、町奉

行司書申出承り置候旨申達。

口上覚

別紙書付之通夫々保証人宿方差入之義願出候ニ付、此段宜御取計之程奉願上候。以上。

戊五月

本願寺御門跡内

原左内

豊前圓照寺

随惠

右両役三人之内兩人ツ、奉伺。

右御用懸り洪蔵帳面ヲ以申出。

同日

一典膳方申出。公儀江召取ニ相成御座候所化御貰ひニ相成、御

寺法ニ而仕置被成度旨之次第申入度旨申出る。

但右八日記ニ委し。

五月二日

一

江州願正寺

無尋

同国法照寺

月溪

江

右来亥夏学林承襲被仰付之。右之通端書ヲ以御用掛り供蔵

申渡。

伊勢明林寺

覺明

石州正藏房

善寂

右同監事被仰付之。右同断。

五月三日

一願書

江州願正寺無尋義、来亥年承襲被仰付候処、知事方書上候節無尋と書損仕候段、不調之次第何共恐入奉存候。何卒以御憐

愍、尋之字等之字ニ御改御書替之程、偏ニ奉願上候。以上。

戊五月三日

学林

御差留

留置するこ

と。

御大法

↓補注①

榮耀

ぜいたくな

こと。また、

気まま勝手

なこと。

司書

『史報』十九

号本文頭注

参照。

佐橋長門守

『史報』十九

号本文頭註

参照。

前田司書

佐橋長門守様

御役人衆中

探了保証人六条元日町

大和屋忠兵衛

一 炎豆(煎カ)

一 こんぶ

一 するめ

一 ちぢ子

一 四品探了江

僧玄保証人六条元日町

紀ノ国や庄助

一 炎豆(煎カ)

一 混布(マツ)

一 するめ

一 ちぢ子

一 四品僧玄江

圓鏡保証人六条置屋町

紀ノ国や庄兵衛

一 こんぶ

一 老品圓鏡江

恩城保証人六条元日町

大和や権七

一 こんぶ

一 二品恩城江

至曉保証人六条元日町

大和屋権七

一 ちぢ子

一 老品至曉江

五月七日

一 昨日伺出候学林論議題之義、伺之通御聞濟之旨御用掛り長左衛門江申達、尤端書無之口達也。

五月十二日

一 学林所化見王之義※十九日・廿日相伺候旨、学林方伺出候由源藤太申出。

同日

一 同日 学林

見王 所化中

来ル廿日与被仰出候二付、虎之間源藤太江申達ス。

但御近習等ハ明日申達候事。

五月廿日

一 越中国新川郡 魚津

一 照頭寺

一 勧学 杳旭

右去四月廿日往生之旨御届申出候。依而此段奉言上候。以上。

五月廿日 御用掛

五月廿日

一 越後河原村 正念寺

一 僧朗

来亥年 御代講。

但当戌年秋年預。

同日

一 和州藤屋(谷カ) 瀧上寺

默言

来亥年副講。

右帳面ヲ以御用掛り左源太伺出ル。

同

一 越中 照頭寺

杳旭

去ル四月廿日往生之旨知事届出候旨、御用掛り洪蔵端書ヲ以届出候。大奥江及言上置候事。

五月廿日

奥向。

巧便

『史報』十八

号本文頭注

参照。

頼母

『史報』十八

号本文頭注

参照。

長左衛門

『史報』十四

号本文頭注

参照。

浄眼

長門国下関

光明寺住。勸

下。

学。僧叡門

来々子年

僧朗

右順次之処、僧朗先年御代講相勤候節不都合ニ付、御内調教諭も有之、何事も相済帰国ニハ候へ共、無子細と申二無之故、右僧朗を老ヶ年繰上ケ被仰付候ハ、難有可存旨、御用掛方伺出、伺之通り被仰付之。

大和国吉野郡 藤村(マヤ)

瀧上寺

默言

来亥年副講被仰付之。例之通端書を以御用掛り供蔵(洪カ)へ申渡ス。

五月廿五日

一来亥年夏御代講師読物一番遠キ処ヲ書出シ候様、御用掛り洪蔵江申達置候処、左之通昨日書出ス。

観無量経 往生論註

右ハ久々講述無之由、別内々此頃学林方も思召被為有候ハ、右之内ニ仕度申出居候由。

同日

一副講久々講述無之分、左之通り御用掛り洪蔵方差出。

正像末和讃 願生偈

五月廿六日

一学林臨時御成之義御用掛方伺ニ付、其段及言上候処、御成無之旨被仰出、其段御用掛へ申達ス。

五月廿八日

一願書

越後 正念寺

慧麟

成美

『史報』十二
号本文頭注
参照。

役懸惣代

成美

来亥年御代講拙寺老僧江僧朗江被仰付、難有奉存候。尚又講本之義阿弥陀経被仰出、是又難有奉存候。就夫乍恐奉申上候者、老僧兼国元二而毎度物語仕候二者、後年自然御役講被仰付候時者、講本者觀無量寿経奉願度由申居候処、来夏御代講被仰付候二付、甚奉恐入候得共、右觀経者多分考置候義門も御座候得者、何卒阿弥陀経を觀経二御成替被仰付被下置候ハ、当人者勿論一同無此上難有可奉存候。依之此段乍恐奉歎上候間、宜御取成奉願上候。

天保九

戌五月 御用懸

御役人中様

一橋様

一橋徳川家
六代当主徳川慶昌。徳川家慶五男。

御三十五日

五七日。小練忌。中陰法要のなかで、閻魔王の裁判日とされる。

五月廿八日

当夏者
『史報』十七
号補注①参
照。

一 学林満講之義、過日五月事と申義無之趣御沙汰二付、尚亦右満講六月四日二仕度旨、尤当夏者聴講人体甚少ク候二付、旁以右之通り相伺候旨、知事方伺出候旨御用掛り洪藏方申出ル。則相伺候処、伺之通りと被仰出候。仍て御用掛り同人江申達ス。 頼母

但し本講四日、副講前三日満講之事。

一 御用掛りニ有之候学林諸記之内、天保六乙未年五月十九日之記ニ云、越前表例年講師御差向七月盆後之処、国内惣法中六月中御差向之義願出候得共、夏中講師他国へ御差向之義ハ御制禁之事故、出願之次第御取上無之御差下ケ之事。右之通先例相見へ候。此段奉言上候。以上。

五月廿一日

御用掛り

六月十二日

一 所化一条之義此頃御裁許ニも可有之哉、典膳方内々役筋へ申込候処、右一橋様御逝去二付、此節伺不相成旨、何分御三十五日相済候は而ハ御裁許伺相成り不申。何れ右之次第ゆへ当月廿日頃成ら而ハ相分不申候趣。尚又右所化之内に老人大病人有之旨、しかし其御方様之所化歟、又裏方其外等之人体哉其段ハ相分り不申候旨。右之趣典膳方申出候事。

【補注】

①御大法

本願寺の寺内法である「御境内律令」（千葉乗隆編『真宗史料集成』九（同朋舎、一九七六年）所収）では、揚り屋入りの際は、「金銀銭・筆墨ハ勿論、鼻紙之外其余一品」も持ち込むことができず、差し入れも「丸散薬・念珠」のみが許されていた。京都町奉行の牢に留置されていた所化たちへは、寺内法で許可された物だけを身元保証人の町人名義で差し入れることとなり、他に若干の食べ物の差入れも許可されたが、贅沢品は禁止されていた。所化たちは「縄付」であったため、食べることに不自由な「魚物骨有之候品」も許可されなかった。

【解説】

本号掲載の『学林諸記』は次の通りである。

天保九年（一八三八）閏四月二十一日条は、前号に引き続き、捕えられた僧玄ら十一人の所化に関する記事である。前号掲載の閏四月十七日条で、十一人の所化のうち六人に衣類・布団が差し入れされているが、残る五人にも同様に衣類・布団が送られている。

閏四月二十八日条は、伊勢国所化中からの願書である。越後慧麟に八月上旬からの講釈・法話を願い出たものである。翌二十九日に本山による決裁が下りている。

同月二十九日条は、学林所化から、留置されている所化への見舞いの申し出がされている記事である。

五月一日条は、来夏の承襲・監事の人選についての記事である。両役とも三人ずつ候補が立てられ、そのうちからそれぞれの二人に任命するか何をたてている。

また同日条では、京都町奉行で拘束されている所化の身柄を、引き渡してもらいたい旨が申し出されている。補注①にもあるように、本願寺内では「御境内律令」において、寺内で起きた問題に対する寺側の裁判権が定められていたためである。

五月二日条は、来夏の承襲が近江無等・月溪に、監事が伊勢覺明・石見善寂に決定している。続いて翌三日条では、知事からの書き上げの際、無等を「無導」と書き誤ったことに対する訂正が、本山に願い出されており、同日差し替えられている。

また同日条では、昨年からは始まった学林の論議題について、今夏は『浄土論』にしたい旨が申し出されている。

五月七日条は、留置されている所化への食べ物の差し入れに関する記事である。寺内法での取り決め（補注①）との折りあい、差し入れる品が限定され、本来掛り役からの書付申請が必要とされていたことがわかる。また、差し入れの名義についても、学林からと明記するのは具合が悪いとして、保証人からという形で申請がなされている。結局、宿主の町人名義で、煎豆・昆布・するめ・ごこんなどの品物が送られている。

続く五月七日条では、学林の論議題について、口達で本山からの決裁が下りている。

五月十二日条は、「見王」について、十九日か二十日の日程で学林から伺がたられ、同日条において二十日に決定されたことが源藤太に伝えられている。

五月二十日条では、越中の杵旭が、昨年四月二十日に亡くなった旨が伝えられ、同日大奥にまで言上されている。

同じく五月二十日条は、来年の代講・副講の人選についての記事である。代講は当秋に年預を務める越後僧朗が、副講は大和黙言が候補として挙げられ、伺がたてられている。

続いて、摂津の川東十三日講からの願いにより、越中巧便が講釈を命じられており、願人・巧便それぞれへの通達がなされている。

五月二十四日条は、再び来年の代講の人選に関する記事である。二十日条での伺の通り、僧朗が代講に、黙言が副講に任じられている。本来、来年の代講は浄眼で、再来年の代講が僧朗であったが、一年繰り上げで僧朗に来年の代講が命じられている。御用掛『学林諸記』一によると、僧朗は天保六年に代講を務めた兄興隆の介護役として上京していた。「不都合」には、その辺りの事情が関係していると考えられる。

五月二十五日条は、来夏代講が扱う読物についての記事である。近年講述されていないものとして、『観無量寿経』と『往生論註』が挙げられており、続く同日条でも、副講の扱う読物が、同様の基準でリストアップされている。

五月二十六日条では、門主の学林への御成について尋ねたところ、御成を行わない意向であることが御用掛へ伝えられている。

五月二十八日条は、越後慧麟と役懸惣代成美からの願書である。来年の代講を命じられた僧朗は、今回『阿弥陀経』を指定されたが、年来『観無量寿経』を講本として扱いたいと願っていたので、変更を願っている。

続く五月二十八日条では、学林満講の時期について記されている。今年の満講を六月四日にしたい旨を申し出たところ、伺の通り本講は四日に、副講は前日三日に満講することが決定された。

また、越前への講師赴任の願書についても記されている。例年なら七月の盆の後に向かうが、越前惣法中から六月中に差し向けていただきたい旨が願い出された。しかし、夏中における他国への講師派遣は禁じられているため、今回の出願は取り上げられないことが取り決められている。御用掛『学林諸記』二の天保六年五月十九日附落には、ほとんど同旨の事項が記載されている。

六月十二日条は、留置されている所化たちの裁許に関する記事である。裁許について、典膳が内々に役筋へ伺ったところ、徳川慶昌の五七日が終わる二十日頃までは判然としない旨が伝えられている。また、所属は不明ではあるが、所化のうち病人が出たことも典膳から伝えられている。

以上が今号掲載分の内容である。

※本文の翻刻・解説は西尾大樹（本学大学院修士課程）、頭注・補注については安達恵祐・小松正弥（本学大学院修士課程）が担当した。

資料室だより

大学史資料室は大宮図書館内に現在は設置されていますが、その所蔵資料は図書館所蔵ではありません。図書館利用サービスの対象外となります。

当室所蔵資料については、継続して修復作業をおこなっており、修復完了後の史資料は当資料室で調査・研究中の為、閲覧対応等（複写・撮影・貸出等を含む）はいたしておりません。

なお、本学関係者については、利用内規（ホームページに掲載）を御参照ください。

大学史資料室は大学の定める休日の他、大学夏期休暇期間中（例年 8 月 5 日頃から 9 月 10 日頃）休業・閉室します。

卒業生及び元教職員の皆様で大学史資料に活用できそうな資料がございましたら、御一報ください。（着払いによる送付はお受けできませんので、御遠慮ください。）

2019 年度刊行号（20 号）特記事項は以下のとおりです。

表紙掲載写真 3 点のうち、大宮女子寮入寮式全体集合写真及び大宮女子寮内写真の 2 点は、本学文学部卒業生の松田逸子様（現姓 村田）、山口美砂子様（現姓 前反）より写真データにて御寄贈頂きました。記して、御礼申し上げます。

※肖像権を考慮し、一定の画像処理をしている箇所があります。

2019（令和元）年度龍谷大学文学部博物館実習十二月展（2019 年 12 月 4 日～12 月 7 日開催）の展示資料（写真掲載許可）及び大学史資料に係る質問対応等の協力をしました。

※15 号より、『龍谷大学史報』は Web 版での発行となっています。

14 号は Web 版でも公開。13 号以前の号（紙媒体発行）は、本学図書館にて所蔵。一部の大学図書館でも所蔵されています。バックナンバーは残部僅少の為、提供できません。複写等については、資料を所蔵している図書館へ御相談ください。

『龍谷大学三百五十年史』通史編 上巻・下巻、史料編 第一巻～第五巻



■体裁：A5 判／布クロス上製本／箱入

■定価：各 1 冊 5,000 円（消費税別）

●ご注文は大学史資料室まで、FAX または書面にてお願いいたします。

●送料：有料（送料の実費をご負担いただきます。）

【表紙解説】

本学の学生寮は、学寮時代より浄土真宗の精神を体得させるための教育寮としての伝統を継承しており、たんなる寄宿舎という扱いではなかった。寮生は、朝夕の勤行をはじめとする日課をこなし、寮規則のもとに共同生活を行っていた。また、4月の入寮式、5月の降誕会、10月の報恩講、2月の終寮式などの年中行事のほか、寮生による親睦組織である寮友会主催のバス旅行などが開催されていた。今日でも寮の同期の交流が続くなど、入寮生同士の関係は深いものがある。

本学は昭和 35 年度を目標に深草学舎への経済学部開設を進めていたが、それにより従来の僧侶養成を目的とする大学から、広く一般大衆に門戸を開く大学への大きな転換になることから、特に女子学生の増加が見込まれた。当時の増山顕珠学長は、京都女子大学の学長を務めた経験から、寮の整備が不可欠であるとの認識を持っており、そのため大宮学舎に女子寮が設置された。

大宮女子寮は、当初は現在の清和館の場所にあったが、入寮希望者の増加により、昭和 37 (1962) 年に南麓へ【左下写真】、さらに昭和 39 (1964) 年にもともと男子寮として使われてきた現在の東麓の場所にあった東寮に移された。大宮では、入寮希望者の増加に対応するため、南麓を寮にするなどしていたが、教室不足が深刻になったため、昭和 40 (1965) 年に寮を学外移転させる方針が決定された。深草でも、昭和 41 (1966) 年に経営学部、昭和 43 (1968) 年に法学部が設置されるなど学生数が増加し、教室不足などが深刻となり、学内に設置されていた寮の学外移転が検討されていた。

集合写真【上写真】に写っている昭和 43 年度の入寮生は、翌年の昭和 44 (1969) 年 3 月に前東麓の工事が開始されることにより、深草女子寮と合併したため、大宮女子寮最後の入寮生となった。

その後、大学紛争の流れの中で、教育寮という在り方について寮生と大学との意見の相違が顕在化し、昭和 45 (1970) 年 3 月に大学側が学生の要求を受け、自治寮への移行を決定した。ここに、本学の教育寮の歴史に終止符がうたれた。自治寮に移行してからも、様々な問題が発生し、学内での慎重な議論が進められた結果、昭和 54 (1979) 年 2 月に新寮生募集停止が決定され、昭和 57 (1982) 年に本学の学生寮は完全に撤廃され、長い歴史に幕を閉じた。

参考文献：龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史』通史編 下巻、1998 年
(小松正弥)

2020 年 3 月 19 日発行

編集・発行

龍谷大学大宮図書館 (大学史資料室)

https://library.ryukoku.ac.jp/?page_id=274

〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1

電話：075-343-3311 (内線 5114) FAX：075-343-3362